

復興のバトン



東日本大震災津波の記憶と教訓を次世代へ。復興と共に進む若者たちがいます。

第4回 中野えびす丸

中野圭さん(大船渡市)



崎浜の海の恵みを全国に

ファンを増やし

崎浜の魅力を広めたい

大船渡市三陸町越喜来、崎浜の漁師・中野圭さんは、ワカメやホタテ、ホヤなどの養殖を営んでいます。

一度は田舎から出たいと、中学卒業後に地元を離れた中野さん。その後、首都圏の大学を卒業し、都内の企業に就職しました。人生の転機が訪れたのは、社会人2年目の春に発生した東日本大震災津波。地元に戻った同級生らと顔を合わせるうちに「地元でできないことはない」と思うように。NPO法人いわて連携復興センターの理事として、復興のサポートを担いました。そして2016年、本格的に就漁しました。漁業を始めて見えてきたのは、市場に出回らない、間引きワカメなど



作業場で手伝ってくれるのは、子どもの頃からお世話になっている親戚や近所の人たち。

の「無価物」が廃棄されている現状。この廃棄するにはもったいない「おいしい無価物」を流通させようと、中野さんは、地元の同世代の漁師たちと「崎浜ヤンキーブランド」を立ち上げました。

首都圏に人脈がある中野さん。ワカメ、メカブ、ウニといった「崎浜ヤンキーブランド」を掲げて、首都圏のレストランなどで、試食イベントを定期的に行うようになりました。「その時のお客さんが、崎浜に来て漁師体験をしたり、海産物を買ってくれたり、今も交流が深まっています」と、中野さん。崎浜に来る人が増え、漁師たちにも港にも活気が生まれています。

徐々に増え始めた「崎浜ファン」。さらにその数を全国に増やし、崎浜の魅力を広めていこうと、中野さんと漁師仲間たちの挑戦は続きます。



漁師仲間の山崎太樹さん、川畑和稔さんとともに立ち上げた「崎浜ヤンキーブランド」。無価物として扱われてきた「間引きワカメ」がまるで、「いいやつなのに社会の中で居場所がない、田舎のヤンキーたち」のようだと感じたことからこのネーミングに。キャッチーなデザインが目を引きます。

大船渡市越喜来にある崎浜で、16代続く漁師「中野えびす丸」。中野圭さんは、漁協に出荷するだけでなく、自ら顧客やレストランに直送するなど、流通を開拓。就漁してからも養殖のノウハウを親や先輩から学び、さまざまなチャレンジをしています。

中野えびす丸